

占領期熊本における新劇と検閲の実態

——霜川遠志作品を中心に

占領期日本、新劇、演劇検閲、地方演劇、ダイザー・コレクション

須川 渡

本稿は、占領期日本における地方演劇の一事例として、熊本を拠点とした劇団文藝座と劇作家・霜川遠志（1916-1991）の活動を検討し、GHQによる演劇検閲の運用実態を明らかにする。まず、早稲田大学演劇博物館所蔵のダイザー・コレクション所収台本を分析し、不許可とされた作品が実際には上演されていた事例などを通して、制度上の検閲と現場での実践との間に乖離が存在したことを指摘する。さらに、霜川による占領下の習作群と占領終了後の長編『田園狂詩曲』を比較することで、霜川が検閲下では十分に描き得なかった農地改革や新旧の価値観の葛藤を、いかに再構成したのかを検討する。本稿は、地方の新劇が戦後民主主義の理念とその矛盾を批評的に舞台化していた点を再評価した上で、検閲資料と上演記録の照合を通じた方法論的意義を提示する。